BORDERLESS HERITAGE

文化遺産

おもてうら

海を越える「円楼」

河合洋尚（かわい ひろなお）
民博 研究戦略センター

世界文化遺産の登録は、現地社会に大きな影響力をもちうる。それは時として空間を越え、他の国に暮らす同郷の人びとにもおよぶことがある。

客家のシンボルとしての円楼

中国福建省と広東省の省境には円形型の集合家屋が点在している。この伝統的な家屋は円形土楼、略して円楼とよばれる。円楼は、福建省西部の永定県、南靖県、広東省東部の饒平県などに分布しているが、なかでも永定県のそれが有名だ。この土楼の一部は二〇〇八年七月、ユネスコの世界文化遺産として登録された。

永定県は、客家とよばれる人びとが住む地域である。この地域の円楼には客家が住んでいる。他方で、南靖県や饒平県の円楼には客家ばかりが住んでいるわけではない。だが、永定県の円楼の知名度が高いため、この家屋は客家文化のシンボルとして語られるようになっている。

福建省永定県の土楼群

コピーされる円形のシルエット

客家は、中国南部のみならず東南アジアなど世界各地に移住している。だが、円楼は、福建省と広東省の省境にしか分布しない局地的な建築であるため、大多数の客家地域には伝統的に存在していなかった。ところが、円楼が客家のシンボルとして認識されるようになると、もともと円楼の文化圏ではない客家地域でも、円楼のシルエットを模した建築物が次々と建設されるようになった。

例えば、二〇〇八年以降、広東省の客家地域で円楼を模した建築物が増加し、四川省成都市の郊外では円楼型の博物館が建設された。さらに、円楼建設のブームは、海を越えて台湾や東南アジアにも広がった。ここ五年のうちに、高雄、シンガポール、ジャカルタ、コタキナバル、ペナン島などで、円楼を模した近代建築が出現するようになっている。

広東省饒平県の円楼

台湾・高雄市の円楼型レストラン

マレーシア・コタキナバルにおける建設中の円楼型建築

団結の象徴か、葛藤の温床か

東南アジア諸国の客家地域を歩くなかでわかったのは、現地の人びとは、円楼を「団結の象徴」としてとらえているということである。彼らは、祖先が中国北方の中原から南方へと移住する道中で、外敵から身を守るためにつくられたのが円楼であると話す。それゆえ、円楼こそが客家の団結心を育んだ彼らのルーツであると信じているのである。だから、マレーシアの客家たちのあいだでは、近年、仲間でツアーを組んで、円楼を「聖地巡礼」のごとく訪問することが流行している。

海を渡った客家は、現地社会では少数者になるため一層の団結が求められる。円楼は、そうした団結の象徴として重視されるようになっているといえる。しかしながら、円楼はあらたな「火種」をもたらすこともある。例えば、ペナン島では、円楼を模した建築物が建てられたとき、一部の客家住民が反対した。彼らは、今まで見たこともないデザインの建築物が、自分たちの文化として語られるのに違和感をもったのだという。

円楼は、世界遺産の肩書きを得たことで、グローバルな広がりをみせている。だが、他方で、彼らの生活や記憶に関係する建築物が「文化遺産」として認識されず、破壊されている。遺産登録をめぐる影響は、地域を超えた問題としてもあらわれている。